

論 文

「リカード派社会主義」ラベルの言説分析

—— 19世紀前半のイギリスの社会主義者の表象の批判的検討 ——

森 下 瑠 偉[†]

要 旨

「リカード派社会主義」は、「労働全収権」によって特徴づけられている。先行研究では、この「リカード派」や「社会主義者」に誰が当てはまるのか、そのラベルは正しいのかが議論されてきたが、その成立事情や背景にまで踏み込んだ考察は行われてこなかった。実は、「リカード派社会主義」や「労働全収権」は、フォクスウェルやメンガーのような反マルクス派が、マルクスの「剽窃」を指摘し、マルクスの理論を貶めるために生み出したものである。同時に、反マルクス派は、労働価値説そのものを攻撃するために限界効用価値説の優位性を主張した。その後、限界効用価値説が普及するにつれ、マルクスの「剽窃」を指摘する必要がなくなり、「リカード派社会主義者」に対する彼らの注目も無くなった。しかし、このような「剽窃」問題を取り除いてもなお、「リカード派社会主義」というラベルは、マルクス経済学者や経済学史家によって、いろいろな疑義が挟まれつつも用いられ、今に至っている。

はじめに

1820年代から30年代にかけて、労働価値説を「労働全収権」的な観点で利用し、現状の社会システム批判をおこなったイギリスの社会主義者らがいた。しかしそれ以降彼らは忘れられてしまった。忘れられた彼らが再び日の目を浴びたのは、H・S・フォクスウェルが「リカード派社会主義者」として彼らを纏めあげたためである¹⁾。彼らは、アントン・メンガーの「労働全収権」によって特徴づけられている。

既存の経済学史研究では、以上のことは概ね承認されている。これらの研究に付け加えられなければならないのは、なぜメンガーやフォクスウェルがそのようなことをしたのか、そして

[†] 立教大学大学院経済学研究科

1) 「これらの著者〔トンプソン、 그레이、 ホジスキンの、 プレイ〕は、 フォクスウェル教授の刺激的な研究とアントン・メンガー博士のトンプソンについての章によって研究者たちに彼らが再び注目されるようになるまで、忘れられていた」(Lowenthal 1911, 13. [] 内は以後筆者による追加)。

「リカード派社会主義」はどのようにして成立したのか、というラベルの成立事情についての研究である。確かに、「リカード派社会主義」というラベルを巡る論争はあったものの、その論争の焦点はどのラベルが正しいのか、ということにあり、なぜ、いかにして「リカード派社会主義」というラベルが構築されたのか、は今まで検討されてこなかった。

結論を先取りして言えば、メンガーとフォクスウェルはマルクスの敵対者であり、両人は、マルクスが『哲学の貧困』で彼らを数人紹介していたことに着想を得て、彼らからのマルクスの「剽窃」を作り出そうとし、その過程で「労働全収権」や「リカード派社会主義者」を生み出した。当時の反マルクス主義者らは、このような言説の流布とともに、「限界革命」も推し進めていた。マルクスの「剽窃」を指摘し、マルクスの価値論の水準を「リカード派社会主義者」のレベルにまで引き下げることと、限界効用価値説によって労働価値説そのものを批判することとは、マルクスへの攻撃という点で軸を一にしていたのである。「限界革命」の成功によって、反マルクス主義者らが「リカード派社会主義者」に注目する必要はなくなった。他方で、反マルクスのでない経済学史家やマルクス経済学者らは、「リカード派社会主義」や「労働全収権」から「剽窃」の要素を除外するなどの修正を施した上で、それらによって19世紀前半のイギリスの社会思想家らを説明してきたのである。

第一節 「リカード派社会主義」ラベル研究における盲点

日本に「リカード派社会主義」を紹介した古典的研究として、堀の社会思想史研究はよく知られている。彼の著作の「リカード派社会主義」の章の最初の節は、「一 意義、範囲、及び根拠」である。その冒頭は、以下である。「リカアド派社会主義またはリカアド派社会主義者……という名称は、今日かなり広く用いられている。しかし、第一に、この派に属すべき思想家としては誰々を数うべきであるか、また第二に、何故彼等に「リカアド派」なる形容詞を冠するか、という点については、まだ多くの疑問が残されている」(堀 [1956] 1977, 59)。

また同様に、平尾(1965)は「リカード派社会主義の特質」の章で、以下の問題設定を立てている。「彼らがなぜリカード派社会主義者とよばれているのか、あるいは、かれらをリカード派社会主義者として一括することが適当かどうか、という問題になると、かんたんには答えることができない」(平尾 1965, 123)、と。すなわち、堀や平尾の問題意識は、「リカード派」や「リカード派社会主義」という名称で当時の思想家らを括っても良いのか、というものであり、その「成立」そのものを検討課題としてはいないのである²⁾。

2000年になって、鎌田は、「リカード派社会主義」の研究史を簡単に振り返って、以下のよう述べている。「ベアーやロウエンサール以来、この名称は一般に通用するようになり、学会の関心事はこれら社会主義者たちに包摂されるべき思想家をより一層深く研究して、その学

2) 隅谷(1952)も同様である。彼は「リカード派社会主義者」の定義ないし共通点、範囲、その意義を明らかにしようとしたが、その由来は検討していない。

説史上の位置付けを明確にすることと彼らの周辺に新たな思想家を発掘することに向けられた……このリカード派社会主義者という名称そのものに疑問が提出されるようになったのは、むしろ第二次世界戦争以後その研究の積み重ねを礎石にしていることであろう。その一つはリカード派という形容詞に対して、いま一つは社会主義者に総括することに対してである」(鎌田 2000, 10-11)。ここから読み取れるのは、最初は「リカード派社会主義者」に分類されるべき思想家の研究が行われ、その後、彼らが本当に「リカード派」や「社会主義者」にあたるのか論争されてきた³⁾、ということである。

これらの研究で足りないものは、「リカード派社会主義」というラベルが、なぜ、いかにして成立したのか、という問題意識そのものである。既存の先行研究では、フォクスウェルやローウェンタールによる「リカード派社会主義」の定義が引用されることはあれども、なぜそのような定義が生み出されたのか、どのように「リカード派社会主義」が成立したのか、は等閑視されてきた。したがって、次節以降では、これらについて明らかにする。

第二節 「リカード派社会主義」ラベルの萌芽

1820年代から1830年代にかけて活躍したイギリスの社会主義者らは、オーウェン主義者らの運動が衰退したのち、急速に忘れ去られていった。忘れられた彼らを最初に発見したのは、マルクスであった⁴⁾。マルクスは1847年に、プルードン批判のために『哲学の貧困』⁵⁾を執筆した。その際、プルードンが初めて「すべての人間を、等しい労働量を交換しあう直接労働者に転換することによって社会を改革しよう」(マルクス1982, 49; MEW 4, S.98)、と考え出したのではないということを指摘するために、マルクスは以下の一文を書いた。

「イギリスにおける経済学の発展を少しでも知っている知っている者なら誰でも、こ

3) 『リカード派社会主義の研究』(蛭原 1994)に対する鎌田の書評へのリプライの中で、蛭原は以下のように述べている。「私は、「リカード派社会主義」の名称は変更の必要なし、と考えている……欧米の諸学者による「リカード派社会主義」の名称を他に変えるべきだという説得力ある見解に、私は未だお目にかかったことがない」(鎌田・蛭原 1995, 181)。要するに、蛭原は「リカード派社会主義」のラベルをそのまま承認している。

4) 「1834年以後、彼ら〔トンプソン、 그레이、 ホジスキンの〕思想は、大衆の理解や同意を以前に匹敵する程度には経験しなかった。したがって、19世紀後半、マルクスが彼らの著作に対して注意を持ったことを除けば、彼らはほとんど完全に忘れ去られていた」(Thompson 1984, 83)。また、「ミルの権威が確立されるにつれて、他の多くの経済学者とともに社会から忘れられてしまった。かくて彼等〔リカード派社会主義者〕は久しく歴史上見失われた存在だった……最初に彼等を再発見し、その古典学派に対する批判を科学的社会主義の中に入取る仕事をしたのはカール・マルクスであった」(隅谷 1952, 249)。

5) MEGA I/6 は刊行されていないため、以後のフランス語版『哲学の貧困』の引用は、青木書店のファクシミリ版による。参考のために、MEW 版のページ数も掲げる。

の国のほとんど全ての社会主義者が色々な時代に、リカード理論の平等主義的適用を主張したことを知らない者はいない」(マルクス 1982, 49; MEW 4, S.98)。

この直後で、マルクスは「Hopkins⁶⁾」, トンプソン, エドモンズ, ブレイの諸著作を掲げ、また実際には4頁ほど挙げられると主張している。さらに、『哲学の貧困』の独訳のエンゲルスによる序文ではこの部分が引用されており、「リカード理論の平等主義的適用」(MEW 4 S. 559-560)に、括弧で「すなわち社会主義的」という補足がある。しかし、マルクスはここに限らずどこでも、彼らを「リカード派社会主義者」として括ってはいない⁷⁾。従って、マルクスは、プルードンの主張する要素を既に先人は持っていたということを指摘するために、彼らの理論が持つある共通点を挙げたに過ぎない。

本論文でこの部分を取り上げたのには、三つの理由がある。一つは、この箇所が「リカード派社会主義者」が再発見されたことを示す記念すべき証拠だからであり、もう一つはメンガーによってマルクスとエンゲルスが非難を受ける原因となった箇所だからであり、最後に、恐らくは、メンガーの影響を受けて、フォクスウェルが「リカード派社会主義」ラベルを思いついたきっかけだからである。

マルクスの死後、A・メンガーは『労働全収権史論』⁸⁾ (Menger 1886)で、この箇所に触れて以下のように言っている。「マルクスとエンゲルスが、このイギリスの社会主義者[トンプソン]の名著を、その初版を1827年とすることによって、四十年もの間、誤って引用しているのは特徴的である……マルクスとエンゲルスはHopkins (マアセット夫人の仮名)を社会主義文献に属するものとして言及しているが、彼女は実際にはもっともはげしく、同時にもっとも有名な社会主義の反対者の一人だった……私がこの顕著な違反諸行為[auffälligen Verstöße]に言及するのは、ただエンゲルスが、20年代と30年代のイギリスの反資本主義文献をドイツの教授らが全く知らないことを非難し……この文献の分野において——私は全く不当だと思っているが——泰斗として振る舞っているからに他ならない」(Menger 1886, 50Fn. 4 / 訳84 注(4))。

これがマルクスとエンゲルスへの「攻撃」であることに疑いはない。理由は三つある。一つは、エンゲルスが言うように、彼はマルクスの記述をそのまま引用しており、『哲学の貧困』

6) 本論文は、「Hopkins」が実際に誰を指しているのか、という論争には立ち入らない。問題は、エンゲルスやメンガーなどがこれについてどのように反応したのか、ということにある。「Hopkins」論争についてのまとめは小松(2006)の付論の29-31ページ参照。

7) 「マルクスの用語において「リカード派社会主義者」ないしは「リカード派社会主義」がないのはもちろんである」(遊部 1967, 10)。

8) 本論文では参考文献で初版の原著を掲げ、邦訳として森田訳を提示している。この訳は1904年の第三版の訳であり、初版とは多少の異同がある。原著の第三版を閲読することができなかったため、第三版にしかない箇所を引用する場合は、そのことがわかるように記述し、翻訳文献を表記する。

はそもそも彼の訳ではないのにもかかわらず、エンゲルスまでマルクスと同じように間違えた、とメンガーが断言していることである⁹⁾。もう一つは、エンゲルスがメンガーの指摘を受け入れて『哲学の貧困』の記述を修正し第二版への序文を加えた¹⁰⁾にもかかわらず、第一のものも含めてそれらがメンガーによって考慮されることはなかった、という文献史的事実である。最後に、そもそも人名と出版年という二つの間違いをもって、「マルクスの諸著作の総量を考えれば意味のない非難」(Eckhart 1975, 34)をしていることである。

このメンガーの本の英訳版にフォクスウェルは序文 (Foxwell 1899) を寄せ、「リカード派社会主義」という言葉を用いた。その影響力は強く、彼によって「リカード派社会主義」という言葉が最初に使われたとみなされるほどである。(Reisman 1996, xli; Hunt 1980, 177; 住谷 1929, 150)。

しかし、実は「リカード派社会主義」という言葉自体は、早くにはボナーによって用いられている。ボナーによれば、マルサスは真実よりも社会の進歩を重視しており、「もしも彼の科学が功利によって偏ることがより少なければ、それはより徹底的になっていたであろう。そして、私たちの時代には、リカード派社会主義——今は亡きリカードの正統派の亡霊がその墓の上で戴冠して座っているように現れる——はなかったであろう」(Bonar 1885, 214/ 訳296)。つまり、「リカード派社会主義」は亡霊のように姿を現しているが、それはマルサスの理論が不完全であったためにすぎない。従って、「リカード派社会主義」の学説は、他に有力な理論がないためにどうにか消えずに在りだけの理論に過ぎない。このことから、フォクスウェル以前の「リカード派社会主義者」の評価は推して知るべしである。

上記のボナーの記述は、フェビアン協会のウォラスによって引用された。ウォラスはその引用の少し後で、以下のように叙述している。ホジスキンは自身の立場を説明する本を執筆しようとしたが、プレースが止めるよう説得した結果、ホジスキンは「マルクスの『資本論』に奇妙なほどよく似た本の見取り図に取り掛かった」(Wallas 1898, 268 注3)¹¹⁾。そして、フォクスウェルはこの注を引用しながら、ボナーの引用を含む267-269頁に注意を促している (Foxwell 1899, lvi/ 訳59。以後、フォクスウェルの序論の訳は1954年の古沢訳を通常用いる)。

したがって、文献学的に言えば、フォクスウェルはウォラスから、そしてウォラスはボナーから「リカード派社会主義」を仕入れた、ということになる。しかし、ここで問題なのは、なぜフォクスウェルはウォラスのこの注に注目したのか、そして消え去るはずであった「リカード派社会主義」はフォクスウェルによって拾い上げられた後、なぜ、いかにして成立することができたのか、である。ほとんど全ての経済学史・思想史のテキストがフォクスウェルの「リ

9) MEGA I /31, S.410-411

10) MEW 4, S.569

11) コップによれば、これはアレヴィには受け入れられなかった (Koepp 1911, 4)。またコップは同じ第一章で、この指摘が全くの誤りであることを明らかにしている。

カード派社会主義」から説明を始めている以上、その初出がどこであるかは問題ではない。そして、それを特徴づける「労働全収権」は、メンガーによって生み出された権利概念である。従って、現在の「リカード派社会主義」がいかに形成されていったのかを明らかにするために、まず彼らのテキストを検討する必要がある。始めにメンガーのテキストから検討する。

メンガーは自身の本の執筆目的を第一版序文で明確に示している。社会主義者の「マルクスとロートベルトゥスの著作が現在ドイツで享受している過大な評価」(Menger 1886, V/ 訳4)を修正することであり、そのために「本書で証明するのは、マルクスとロートベルトゥスが彼らの社会主義の最も重要な諸理論を、その見解の出所を挙げずに、昔のイギリスとフランスの社会主義者の理論家から借用したということである」(Menger 1886, V/ 訳4-5)。エンゲルスは、1885年に『資本論』第二巻の序文で、ロートベルトゥスの、マルクスが彼から剰余価値論を剽窃したという主張に対して反論した¹²⁾。それに対しメンガーは、翌年に、マルクスもロートベルトゥスもイギリスの社会主義者らから剽窃しており、従って彼らの理論に独創的な点は何もないと断言した¹³⁾のである。

メンガーによれば、マルクスは特にトンプソンから彼の剰余価値論を「剽窃」した。トンプソンは、リカードのように「労働のみが交換価値の源泉であるという根本思想」から出発し、「自分の労働によって価値を産み出したすべての者に、彼の労働の生産物は減らされずに帰属しなければならない。つまり、別の言葉で言えば、どんな労働者も労働全収権が与えられるべきであるという法学的結論」(Menger 1886, 51/ 訳78)を導き出した。そして、マルクスの「剰余価値理論全て、つまり剰余価値の概念、その名称、またその額についての見解は、根本的にトンプソンの著作から借用[entnommen]されて」(Menger 1886, 97/ 訳138)いる。この文には注がついており、そこでは「剰余価値の真の発見者はゴドウィン、ホール、そして特にウィリアム・トンプソンであった……マルクス自身は、彼のその見解の出所を、他の場合には全く省かずに引用を伴っているのだが——ロートベルトゥスと同じように——秘匿した」(Menger 1886, 97Fn.1 / 訳152注(1))と言っている。そのため、ここでの「借用」が「剽窃」を意味していることに疑いはない。さらに、マルクスは「剰余価値理論の必要な補足、特に生産手段と有用な物に対する私的所有の法学的批判も欠いている」(Menger 1886, 97/ 訳138)。以上より、メンガーは、マルクスはトンプソンに遥かに劣っている¹⁴⁾、と結論づけた。驚くべ

12) MEGA II/13, S.9, 16-21

13) 「真実は以下である。ロートベルトゥスもマルクスもその根本的な理論を昔の社会主義者から、くわしく言うとロートベルトゥスは主にブルードンとサン・シモン主義者から、マルクスは特にウィリアム・トンプソンから汲み取った。この優先権争い全部は、ある種の滑稽味がないではないが、もしもロートベルトゥスとマルクスが、同じくらい入念に、公衆に自分の意見の出所を知らせないように注意しなかったならば、生じなかったであろう」(Menger 1886, 79-80/ 訳115-116)。

14) 「私は躊躇わずに、人が喜んで彼らを科学的社会主義の創造者とみなしているマルクスとローベルトゥスは、その深さでも根本さでも、彼らの先駆者にはるかに凌駕されていた、と宣言する」(Menger

きことに、メンガー本人によれば、彼はこの主要目標を達することができた¹⁵⁾ so である。

メンガーのもう一つの執筆目的¹⁶⁾ は、社会主義の根本思想を法学的な形で表し、それによって現代の法秩序を平和的改良の方法を用いて変革できるようにすることである (Menger 1886, III / 訳3)。あるいはメンガーが提唱するようなやり方でなければ社会を変革できない¹⁷⁾、と主張することになった。

メンガーが法秩序に限定するのは、社会主義者らの要求は多種多様であれども、彼らに共通の綱領は、法理学的要求、すなわち現代の財産法 (物権、債権及び相続権) の根本的改造だからである (Menger 1886, I / 訳17)。メンガーは、財産法の改造以外の社会主義者の要求を全て切り捨てることによって、彼らの終極目標をそれに限定したのである。あらゆる社会主義者の共通の要求が法の改造であるということは、社会を変えようと思うどんな者でさえも、法律や、行政を担う国家の存在を常に措定している¹⁸⁾ ことを意味する。したがって、新しい秩序を生み出す際に必要なのは、今の法体制や国家の枠内で現在の秩序を変えること、言い換えれば、「平和的改良の方法」によって変えることである。

確かに、メンガーは、現行法の改造の必要性を認めてはいる。「しかし、必然的な変革は、私たちの今日の社会秩序が、封建制を完全に排除するためにただの一撃だけで済むようになる

1886, V / 訳5)。

15) 第三版への序文において、メンガーは、本書の主要目的が、マルクスとロードベルトゥスが、先行する社会主義者からの借用しているのを指摘することになり、ドイツやフランスやイギリスの社会主義史で自分の説が支持されるに到って、それが達成されたと宣言している。このことについては、森田訳の7ページを参照。

16) エンゲルスはラファエルグへの手紙の中で、メンガーを「出世主義者」(MEW 36, 565 and 572) と呼んでいる。もしもメンガーが出世も目的としていたならば、彼はそれを達成した。最終的に彼はウィーン大学総長に就任し、また宮中顧問官にもなったからである。

17) 「メンガアの法理論は先づその出発点において、唯物史観を排斥して理想主義、観念主義の立場からその理想を正義の観念に求め、更にその理想実現の手段として法律は経済よりも一層根本的のものである。い、換えれば、法律的転化に基づくのでなければ、経済的転化は成就するものではないと考えた」(峯村 1947, 120)。

18) メンガーがマルクスの「剽窃」を指摘した箇所、またフォクスウェルなどへの言及においてでしかホジスキンを取り上げていないのは、ホジスキンの国家や議会制度、さらには法制度に対して反対していたからであろう。法学者のメンガーにとって受け入れがたかったのも無理はない。しかし、デーによれば、メンガーがホジスキンを付随的にしか取り扱っていないのは、ホジスキンの社会主義者ではなかったからであり、それはメンガーの三つの経済的基本権のうちホジスキンの「労働全収権」しか主張していなかったために正当化される。(Day 2019, 295)。その理由はメンガーが英訳版6ページで生存権や労働権に対して批判的であったことに求められるようであるが、そのような記述は見当たらなかった。後述のように、メンガーは労働権と生存権との相剋から生まれる個々の社会主義者の相違に注目しているのであって、どちらか一方の権利を擁護してもう片方の権利に反対しているわけではない。そもそも、先に見たように、マルクスが社会主義者として挙げている「Hopkins」はホジスキンの間違いであるというのが、メンガーの主張であった。

まで、数世紀にわたって封建制を解体し破壊し続けたのと同じように、長い歴史的発展の方法によって行われるだろう」(Menger 1886, 164/ 訳225)。メンガーは、現行法は労働者階級の勢力の伸長、彼らの社会変革の欲求を反映してはいないかもしれないが、彼らは数百年のあいだ苦しみつつも法律を改造することに汲々としなければならない、と説くのである。要するに、社会変革は非革命的に行われなければならないのである。メンガーの主張が改良主義者、あるいは革命を否定する者に受け入れられたのは当然のことであった¹⁹⁾。

それでは、このように法学的に表された社会主義の根本思想とは、何であろうか。それは社会主義の究極の目的である経済的基本権であり、これは更に「労働全収権」、「生存権」、「労働権」に分かれる。「労働権」は「労働全収権」のコロラリーに過ぎないため、重要なのは前者の二つの権利である。

「労働全収権」とは、「どの労働者も彼の労働の全収益が与えられるべきであるという命題」(Menger 1886, 6/ 訳23)から生じる、「法秩序によって彼の労働の全収益が彼に配分されるという権利」のことである。注意を要するのは、メンガーによれば、「労働全収権」は私有財産と矛盾する、ということである。「なぜなら、このような状態においては、生産手段と有用な諸物は法秩序によって個々の個人に配分されているので、所有者は、その法律上の権勢ある地位に基づいて、家賃、小作料、貸金利子の形態あるいは他の方法で、不労所得を徴収しうる地位におかれているからである」(Menger 1886, 150/ 訳208)。つまり、メンガーによれば私有財産と不労所得は切り離せないものであり、「労働全収権」は不労所得を認めないため、「労働全収権」は私有財産制度と矛盾するのである。

また、メンガーは同時に「生存権」も唱えている。「生存権」²⁰⁾とは、個人の生存のために必要な欲望を満たす権利であり、この欲望は人々の欲望の中でも重要な欲望である。ただし、メンガーは肉体上の諸欲求以外の欲求を満たす権利も「生存権」に含めている。というのも、メンガーは、未成年者が受ける教育も「生存権」に含めているからである。

メンガー自身が述べているように、これら二つの権利は対立しており、同時に完全に実現することは不可能である。働けない者に何かしらの給付を行うのであれば、勤労者は自己の労働生産物の一部を何らの等価物なしに譲渡することになるからである。したがって、ここから、相反する「労働全収権」と「生存権」のどちらをどの程度優先するか、というあらゆる社会主義者が直面する、メンガーが生み出した「難題」が生じる。

19) 峯村によれば、メンガーが本を執筆していた間は資本主義の高成長期であり、「資本主義の崩壊の悪魔は遠く駆逐され、同時に労働者階級もまた資本主義制度の範囲内において、この増大した生産力の一部分に均霑し、その地位を向上せしめ得る期待をもつことができたのである……改良派の一分派ともいべきメンガーの法曹派社会主義の主張が当時相当多くの共鳴者を見出したことは何らの不可思議はない」(峯村 1947, 141)。

20) 「社会のどんな成員も持つ、他人のより切実でない欲望が満たされる前に、彼の生存の維持に必要な物とサービスが配分されることを要求する権利」(Menger 1886, 9/ 訳25)。

つまり、メンガーは「労働全収権」と「生存権」とを法学的に確立し、これに基づいて社会主義者らを整理しようとしたのである。メンガーによれば、「労働全収権」の消極的機能は、「地代の形で獲得されようと、資本利潤の形で獲得されようと、すべての不労所得は廃除されるべき不正である、と考えることにある……この消極的機能においては、労働全収益権は——意識的あるいは無意識的に——すべて社会主義者によって承認されている」(Menger 1886, 148/訳206-207)。つまり、メンガーによれば、資本家などによる搾取、あるいは対価のない交換を認めない社会主義者は全員、「労働全収権」的な思想を持っている。ということは、「労働全収権」という権利概念は、あらゆる社会主義者に通底する概念であり、したがってメンガーが彼の本で取り扱っているゴドウィン、プルードン、ロードベルトゥス、サン＝シモン派、マルクス、さらにはミルなどにも見出すことができるような曖昧な概念である²¹⁾。つまり、「リカード派社会主義」を特徴づけている「労働全収権」は、提唱者のメンガーにとってはそうではなかったのである。

フォクスウェルもメンガーと同様にマルクスの「剽窃」を指摘している。しかし、最初にフォクスウェルの序文で注目すべきなのは、リカードと、彼の影響を受けた社会主義者に対するフォクスウェルの非常に低い評価である。

「私が社会主義の文献の研究を進めるにつれてより痛感させられたのは、リカードと、リカードを自称していた、有能ではあるが幾分頑固で偏狭な作家らの一群によって不幸に彩られた経済学説が広範囲に及ぼした悲惨な結果である。近代社会主義にその空想的な科学的基礎を与え、また、その正当なことを証明しないにせよ、その革命的形態をよびおこしたものは、リカードの素朴な一般論であった……リカードと、なおさら、彼を俗流化した人々は、社会的研究上の仮説を非科学的に用いることから生ずるであろうような……分析は、制限的にしか現実の事情に適用できない……リカードは、ジェヴォンズが述べているように、イギリスの経済学の全発展過程を不当に歪めた。すなわち、リカードのために、イギリスの経済学は、非歴史的かつ非現実的となった」(Foxwell 1899, xlii/訳44)。

21) エンゲルスとカウツキーは、メンガーに反論して1887年に『法曹社会主義』を発表した。やや長いですが、メンガーの方法論への決定的な批判であるため、以下に引用する。「しかしわかりきったことだが、さまざまな諸国の、さまざまな発展段階にある、さまざまな社会主義学説を、この二つの「スローガン」[労働全収権と生存権]のなかにむりに詰め込んだために、叙述全体がごまかされている。それぞれの学説はどれもその固有性こそが、その学説の歴史的な意義をなしているのに、そうした固有性は、ここでは副次的なものとしてどけられてしまうばかりか、このスローガンからはずれ、それに矛盾しているからということで、まったくまちがったものとしてしりぞけられるのである」(MEGA I/31, 403/MEW 21, 499)。

フォクスウェルにとってリカードとは、イギリスの経済学を誤った方向に導いた元凶であり、また彼の抽象的で非現実的な非科学的理論は、「まったく有害でかつ人心を惑わせる」。その結果、「リカードは、この不完全な経済理論の提示によって、社会主義のどんな作為的な著作家にもまして、彼が説明しようとしていた社会の形態の基礎を弱らせた。しかし、彼はその形態を、理想的な社会状態ではないにしても、典型的で自然的であると信じていた。ウィリアム・トンプソンは、リカードの見解を彼らの主張の全くの基礎として用いた一連の社会主義的著作家——マルクスとラッサールにおいて全盛期を迎える——の一人に過ぎなかった²²⁾」(Foxwell 1899, xli-xlii/ 訳45)。つまり、フォクスウェルの認識によれば、リカードによって経済学説が歪められ、そのために初期はトンプソンが、後にはマルクスやラッサールのような既存の社会制度に挑戦する人々が現れたのである。リカードに対する彼の評価の低さは、マルクスやラッサールなどの「社会主義者」らに対する彼の敵愾心を反映している。リカードと彼らの間に挟まるトンプソンに対して、「リカード派社会主義者」の生みの親であるフォクスウェルは、実は高い評価を与えてはいないのである。

それでは、「リカード派社会主義者」とは一体何なのであろうか。「彼ら[トンプソンやその他の人々]は、リカードの結論のあるものが彼らの権利の観念と対立することに気づき、またリカードが彼の前提を今ある社会の現状からとってきたため、彼らは当然に、彼らの攻撃力の全てをこの社会の現状に向けた。そしてこの理由のためにこそ、私はそれをリカード派社会主義者と呼んだのである」(Foxwell 1899, xlvi/ 訳76)。フォクスウェルがどれだけ表面上「リカード派社会主義者」を持ち上げようとも、彼らがリカードの誤った経済学を利用したことに変わりはない。そのため、「リカード派社会主義者」は、フォクスウェルにとって、肯定的な表現であるどころか、実は「蔑称」なのである²³⁾。

それだけではなく、フォクスウェルはオーエン主義者の運動に対しても批判的である。「今日私たちがこの名前[社会主義者]から連想する思想は、オーエンではなくて、むしろトンプソンと彼の学派からより多くきている。私はこの学派の人々が、どんな場合においても、オーエンから思想上の感化を受けた、ということとはできない。反対に、リカード派社会主義は、オーエン派の運動の発酵素であり、オーエン派の文献へのあらゆる優れた寄与の土台であった。他方でそれは、憲章の周囲に集まったオーエン主義の政治的分派を刺激することにおいて決して少なくない役割を果たした。オーエンではなくリカードこそが、イギリス社会主義にたいして実際に影響力のある刺激を与えた」(Foxwell 1899, lxxxiii/ 訳76)。トンプソンの学派が具体

22) デ・ヴィーヴォによれば、この引用の最初の部分は、「トインビーを明らかに意識している」(De Vivo 1988, 183)。

23) だから、たとえ皮肉であるとしても、ハントのように「フォクスウェルはただ単にリカードの影響の規範的に中立な観察者であったのではなかった」(Hunt 1977, 323)と指摘するだけでは不十分である。

的には誰を指図しているのか、というのは考察の余地があるが、少なくとも、オーエンからトンプソンが影響を受けていないというのは、明らかに史実に反している（平尾 1975, 125-126）。しかし、ここで重要なのは、リカードがイギリスの社会主義ないしオーエン派の運動に対してオーエンよりも大きな影響を与えた、とフォクスウェルが史実を捻じ曲げてでも主張していることである。ということは、リカードが意図せざるにもかかわらず経済学を誤った方向に導いた以上、彼に影響を受けたオーウエン派の運動も捻じ曲げられた、ということの意味する。フォクスウェルがオーエン派からオーエンを切り離してオーエン派を称揚する一方で、リカードの悪影響を受けたということを暗に指摘していることは、無視するべきではない。

つまり、フォクスウェルによれば、リカードは、その後継者を通じて、理論面でも実践面でも悪影響を及ぼしたのである。フォクスウェルがゴドウィンを「イギリス社会主義学派」²⁴⁾の先頭に位置付けているのは、本人の言うとおりの、メンガーの意見に従ったというのももちろんある²⁵⁾のであろうが、ゴドウィンがリカードの主著よりも遥か前に『政治的正義』を出版していたという事情も勘案しなければならない。

それでは、なぜフォクスウェルはこのような「リカード派社会主義者」について研究するのであろうか。彼らがもたらした「悲惨な影響」について明らかにするためではなく、マルクスの剽窃を証明するためである。例えば、フォクスウェルは、ホジスキンの (Hodgskin 1825) の流動資本と固定資本の分析を引用し、「私がこれらの節を引用するのは、支持するためではなく、彼がどの程度までマルクスを先取りしているかを読者に判断してもらうためである」と言ったのち、ホジスキンの資本家と企業家とを綿密に区別している点でマルクスや他の経済学者に抜きん出ていると主張している (Foxwell 1899, lix/ 訳62)。

さらに、マルクスはグレイやブレイによっても先取りされている。「彼 [グレイ] の初期の著作に関するかぎりでは、グレイはマルクスが付け加えるべきものをほとんど何も残していない、暴力の使用の煽動という点を除いて。グレイはこれに強固に反対したのであり、あらゆる形態の暴力を非難した」(Foxwell 1899, lv/ 訳57-58)。「この著作 [ブレイの論文] を読むどん

24) 小松は、フォクスウェルがゴドウィンもリカード派社会主義者に入れていると主張している (小松 2006, 2)。確かにフォクスウェルは「イギリス社会主義学派」としてゴドウィン、ホール、グレイ、ホジスキンのブレイ、トンプソンを挙げているが、彼が「リカード派社会主義者」という時には、流石にゴドウィンは省かれているのではないだろうか。「リカード派社会主義はオーエン派運動の庇護の元に成長した。そしておそらく、ゴドウィンやホールに降りかかった忘却と閑却からそれが免れたのは [its escape], オーウエンのおかげであった」(Foxwell 1899, lxxxvi-lxxxvii/ 森戸訳463)、とフォクスウェルは述べている。この箇所は、「リカード派社会主義者」のうちホールとゴドウィンは忘れられたものの、「リカード派社会主義」一般は影響力を持ち続けた、と解釈することも可能ではある。しかし、ホールやゴドウィンは「リカード派社会主義者」に含まれておらず、オーエン派の保護を受けず消え去った、と解釈することも可能ではないだろうか。フォクスウェルによるホールやゴドウィンについての解説において、リカードの名前が出ないこともそれを裏付けるように思われる。

25) Foxwell 1899, xxviii/ 訳33

な者も、それがカール・マルクスの最も特徴的であると考えられている思想の多くを明らかに先取りしているを感じずにはおれない」(Foxwell 1899, lxx-lxxi/ 訳73)。フォクスウェルによれば、マルクスは『哲学の貧困』ではブレイをよく引用していたのに対し、『資本論』においてその名は見出されない。しかし、「ここでこそ、マルクスはブレイがすでに1839年に精力的に全面に押し出していた利潤論を発展させた。まさにマルクスにとって幸運だったのは、ブレイがドイツでもその時「ほとんど知られて」いなかったことである」(Foxwell 1899, lxxi/ 訳74)。つまりフォクスウェルは、マルクスはホジスキンのブレイから「剽窃」しており、彼の理論に独自性はない、と主張しているのである。フォクスウェルにとって「リカード派社会主義者」が肯定的な意味を持つとすれば、それは彼らがマルクスの先駆者、マルクスによって「剽窃」された者であり、そのことによってマルクスに独自性はないと示すために役立つ限りのことである²⁶⁾。

ところが、マルクスが実際に誰から「盗用」したのか、というのは実は問題ではなかった。フォクスウェルによるメンガーの説に対する批判はどこにも見出されない。メンガーも同様である²⁷⁾。フォクスウェルはむしろブレイやグレイをマルクスの思想の大部分の先行者として位置付けているが、それはメンガーによって無視されている。重要なのは、誰であれ、マルクスが先行する社会主義者から「盗用」した、と主張することである。このような非難が何を目的としてなされるのかを、ローゼンベルグがすでに指摘している。「第一、これによってマルクスの意義は無に帰する。第二、尚ほ一層重要なことは、マルクス主義と各種の空想社会主義学説とは同一だという思想を吹き込んで、マルクス主義を害のないものとなし……プロレタリアートを武装させるものを取り去らうとする」(ローゼンベルグ 1937, 399)。

我々は、以下のことを結論することができる。すなわち、メンガーもフォクスウェルも、マルクスの学説はトンプソンやホジスキンのような先行するイギリスの思想家らの剽窃であると指摘することによって、マルクスのオリジナリティそのものを攻撃した。このような反マルクス主義的な文脈の中から、「労働全取権」や「リカード派社会主義」が生み出されたのである。

20世紀に至っても、マルクスのオリジナリティは相変わらず攻撃されていた。ローウェンタールによれば、「トンプソン、グレイ、ホジスキンは労働価値説を産業の全生産物に対する労働の要求の基礎として用いた……労働価値説を社会主義の基礎として用いることにおいて、マ

26) フォクスウェルが何のためにそのラベルを用いているのかを検討することによって、ようやく、なぜフォクスウェルがウォラスの記述に注目し、「リカード派社会主義」ラベルを生み出したのか、という問いに答えることができる。とはいえ、ホジスキンのブレイやグレイは、メンガーがほとんど取り上げないほどの、「マイナー」な社会主義者である。「剽窃」元はいくらでもあるだろうに、なぜフォクスウェルは彼らに着目したのであろうか。それはマルクスが『哲学の貧困』で彼らを挙げ、メンガーがそれについて非難していたことがきっかけではないだろうか。

27) メンガーは、フォクスウェルの自著への序文やアレヴィを見て、自著の第三版で、彼らが源泉をホジスキンに見出していると指摘しているに留めている。この点については、森田訳83ページを参照。

ルクスは先取りされていた」(Lowenthal 1911, 102-104)。ローウェンタールの解説によれば、「リカード派社会主義者」がマルクスに先立って労働価値論を基礎にした剰余価値論を展開した。つまり、彼らによれば、マルクスは先行のトンプソンやホジスキンの単なる追従者であり、「リカード派社会主義者」の思想を発展させたに過ぎない。「リカード派社会主義」は、前述のような経緯を経て誕生した²⁸⁾のである。

フォクスウェルによる「リカード派社会主義」ラベルは、消えかかっていた「リカード派社会主義者」に注目を集めさせるという点で、肯定的な評価が与えられてきた。しかしそれはコインの表であり、その裏には、マルクスは彼らの模倣者に過ぎないと書かれているのである。それを考えれば、手放しでこのラベルを肯定的に評価することはもはやできないであろう。

第三節 マルクスの「剽窃」の浸透と「リカード派社会主義」の無意味化

1880年代後半のいわゆる「社会主義の復活」の時期には、フェビアン協会のメンバーを含んだ反マルクス主義的な知的潮流が広がっており、マルクスの「剽窃」は、そのような知的サークルにも広がっていた。また、マルクスの価値論に対する攻撃のために、A・メンガーの実の兄であるC・メンガーや、ジェヴォンズらの限界効用価値説が利用された。反マルクス派の人々は、マルクスの研究成果を貶めるためにマルクスの「剽窃」を捏造するだけでなく、限界効用価値説を借りて、労働価値説そのものを攻撃したのである。

このどちらも行ったのがフォクスウェルである。彼は1887年の資本論の英訳において、以下の書評を寄せている。「もうとっくに、この「理論」が結論の先取りを偽装するための手の込んだ試み以外の何物でもないということが明確に宣言される時である……価値はただ凝固した労働であるという最初の想定は……部分的にはリカードの誤解に基づいており……効用は、それが希少であるならば、その希少さの原因や解決策がなんであれ、価値を持つ。このことに全ての経済学者が同意している……ジェヴォンズ、マーシャル氏、ジジウィック博士のような著者の著作に見られるようなこの分析の命題は、マルクス主義的な批判によって一つも揺らぎはしない」(Foxwell 1887, 5)。したがって、フォクスウェルによれば、マルクスはホジキンやブレイから剽窃したが、実は彼らが元にしたリカードの労働価値説そのものが間違いであった、ということになる。マルクスに対するフォクスウェルの攻撃的意図はここでも明らかである。

このように限界効用価値説をマルクスへの攻撃に用いた最初の事例は、おそらくウィックス

28) 他にアレヴィによれば、「ホジスキンの思想はマルクスの哲学において安まる場所を得て、一般的に普及した」(Halévy [1903] 1956, 169)。ただし、アレヴィはマルクスを「剽窃者」とであると指摘しているわけではない。「このこと〔マルクスが先行するイギリスやフランスの社会主義者などから学んでいたこと〕は全て、カールマルクスの独創性を損なうと主張しているのではない。マルクスの独創性は彼の経済学説(剰余価値理論など)のあれやこれやの部分にあるのではなく、マルクスが彼らから借りた要素を他者に用いた方法、彼の進歩の哲学、彼の進歩の解釈のための歴史的方法の中にある」(Koepp 1911 5 Fn (2))。

ティードである。ウィックステードもまた、資本論英訳を批評している。彼は、機械の導入によって以前よりもある商品の生産に必要な量が半分になっているにもかかわらず、その商品の役立ちは相変わらず同じままであるという問題に直面して、以下のように述べている。「このように提示された問題の完全で決定的な解決こそがスタンリー・ジェヴォンズの名前を不滅のものにし、私がこの記事で試みるべきあるいは試みたことは、彼が私たちの手元に置いた強力な調査手段を、議論されている問題に生かすことである……私たちは……交換価値そのものは常に直接に「労働の量」ではなく、抽象的な効用に左右されるということを明らかに知覚する」(Wicksteed 1884, 399)。

ホブズボームによれば、この批評よりも「効果的であったマルクスの批判はほとんどない²⁹⁾……ウィックステードの記事は、マルクスの価値説はどうも社会主義の経済的正当化と関係がないという誤った感情を社会主義者の間に作るのに、フォクスウェルやフrintの記事の感情的な非難よりも多くのことをした……ウィックステード、エッジワース……ショウ、ウェップ、ウォラス、オリヴィアそしてその他の者が『資本論』を議論したハムステッドの議論グループにおいてこそ、『フェビアン論集』の多くが成熟したのである」(Hobsbawm 1968, 247/訳 224)。フェビアン協会とは、このような反マルクス主義的な風潮の中で形成された協会であり、改良主義を謳ったのも、つまり革命を否定したのも当然のことである³⁰⁾。また、修正主義者であるベルンシュタインも、フェビアン協会³¹⁾やメンガーの影響を受けていた³²⁾。

29) これとは反対に、デ・ヴィーヴォは以下のように述べている。「ウィックステードは実際にはあまり労働価値説を批判しておらず、むしろ限界効用価値説の妥当性を独立して確立させることを試みている……私が考えるに、ウィックステードの批判は『資本と利子』の中でバウム＝バヴェルクによって同じ年に出されたものよりも徹底していない。もしもそれが実際に効果的であったならば、それはそれ自身の力に大きく負うのではなく、むしろその敵対者の（無能とは言わないまでも）弱さのためであると私は主張する」(De Vivo 1987, 40)。ハインドマンやケインズなどの敵対者がウィックステードに対して有効な批判をできなかったというのは正しい。しかし、ウィックステードが、資本論の書評という場で、その本と真っ向から対立する理論の有用性を樹立させようとし、その際、それが労働価値説と融和的であるかのように見せかけたということも見逃すべきではない。やや逆説的ではあるが、ウィックステードの攻撃が比較的穏当であったがために、かえって、『資本論』に対して興味を持っている、あるいは好意的な社会主義者らに対して、それを誤解させる効果を生み出しえたのであろう。

30) 1889年出版の『ファビアン論集』には、「限界効用価値説が採用されており、マルクスの労働理論のどんな痕跡も残されてはいない」(De Vivo 1987, 42)。

31) エンゲルスの言うように「フェビアン熱」に浮かされてはいないとしても、フェビアン協会の改良主義的側面にベルンシュタインが注目したのは事実である。

32) メンガーによって「社会主義の思想が……単純なる法的観念に転化さるるに於て、茲に初めて真正なる政治家は、現行法制が……虐げられて居る社会階級の為に、如何に修正改造されなければならぬかを説破するや、後に修正派の勇将となれるベルンシュタイン一派の人々は、大に之を歓迎したのである」(米田 1919, 368)。ベルンシュタインがメンガーを知っていたのは間違いない。彼はカウツキーに彼の本について問い合わせている (MEGA I /31, S.1147)。

先の引用にあるように、フェビアン協会の重鎮であるウェッブ夫妻、ウォラス、ショウなどは、紆余曲折はありながらも、マルクスの価値論を否定し、限界効用価値説を受け入れた。例えば、B・ウェッブは、未発表に終わったが、1887年に『マルクスの経済理論』を執筆し、1926年に手直ししている。佐藤によれば、リカードやマルクスの労働価値説は、肉体労働に限られ、頭脳労働を無視しており、その結果、生産組織を制御する労働やコミュニティに必要なものに対する知識に現れる経済活動が無視した、と彼女は批判しており、マルクスが行うような労働の抽象化は、形而上学であって、現実性がない³³⁾ (佐藤 2014, 13-14)。

そしてまた、B・ウェッブはマルクスのオリジナリティも否定している。「オーウェンは彼の経済学を彼の友人のウィリアム・トンプソンから取ってきた。トンプソンは、ホジスキンのホジスキンの著名な弟子、カール・マルクスのように、計算の際にレントの法則を見落とし、全ての交換価値は「労働時間」のみによって計測されると教説した」(Webb 1894, 147/ 訳185)。「ホジスキンの著名な弟子」という言葉から、フォクスウェルやウォラスの影響が見て取れる。

このような反マルクス主義の影響を受け、マルクス主義から転向したのがショウである。彼は、名古屋によれば、1884年の秋にS・ウェッブの勧めでカール・マルクス・クラブに参加した際、ショウはマルクスを擁護したが、S・ウェッブやオリヴィアから激しい批判を受けた。その後、ジェヴォンズの理論に出会い、マルクスから離れていった (名古屋 2005, 59-60と79-80)。もっとも、ショウの転向には、ウィックスティードとの論争も理由としてあるであろう。デ・ヴィーヴォによれば、ショウは彼との論争に入った時点ですでにマルクスの理論の妥当性に疑いを抱いており、彼に説得されて確信的なジェヴォニアンになった (De Vivo 1987, 42)。

また、限界革命を前提にして経済学の基礎を築いたマーシャルも、一度はマルクスの「剽窃」を受け入れた。マーシャルによれば、アントン・メンガーは「いかにロートベルトウスとマルクスが、生産手段の国有化に関する彼らの実際的な結論と彼らの議論の理論的基礎を両方とも、初期の著作、特にウィリアム・トンプソン……から借りたということをよく示した」(Marshall 1890, 619n (1))。ホブズボームによればこの注は1989年の第四版以降削除された³⁴⁾ が、重要なのは「彼の批判は、人が想像するよりも……はるかにマルクスの著作の詳細な研究していな

33) 「カール・マルクスと彼の弟子は、トンプソンやホジスキンのリカードに従って、第三のもの〔交換価値〕を生み出すことは第二のもの〔欲望〕を必要とすると認めるのを拒否した……不気味なマルクスの世界では、人々が機械人形である一方で、商品は魂をもち、貨幣は生命を吹き込まれ、資本は自分自身の生活過程を有するのである。かくして、満たされるべき何らかの欲望の存在を意識することさえせずに、利潤を形成している「機械人形の所有者」というこの考えは……事実との明白な食い違いの点で、グロテスク以外の何ものでもないのである」(Webb 1926, 379-380/ 訳86)。

34) 「アルフレッド・マーシャルは彼の『経済学原理』の中で、マルクスが彼の資本の搾取の理論をトンプソンの著作から直接引き出したということに同意している」(Reisman 1996, lxi)。ここには文献注がないため、どの版から引用したのかはわからない。

かったことに基づいているよう思われる」(Hobsbawn 1968, 249/ 訳223) ことである。限界効用価値説が正しいと認めれば、マルクスを学ぶ意義はなくなり、マルクスの「剽窃」を安易に信じることもできるのである。

もっとも、非マルクス学派の中でも、例えばシュンペーターは、マルクスの「剽窃」という考えを支持しなかった。「私はマルクスの搾取理論が彼の体系の中で意味する全てを完全に先取りしているようなどんな事例も(トンプソンやホジスキンの中でさえ)見つけられなかった……剽窃の非難は事実無根である……重要なのは、この非難が、しばしば経済学者に繰り返されているにもかかわらず、最初に経済学者そのものではない著者のアントン・メンガーによって提起されたということである」(Schumpeter 1954, 454-455)。彼がロートベルトゥスとマルクスの類似性をいたるところで指摘する³⁵⁾のを除けば、マルクスの経済理論の彼の評価は、今までに見てきた他の著者に比べれば、幾分公平であると言える。しかし、彼は労働価値説については明確にこれを否定している。マルクスとリカードの価値論は不完全競争下では有効な理論たり得ず、完全競争下でも労働が一種類でなければ円滑に働かない。「それ[労働価値説]に取って代わった理論——その最も初期のそして今では時代遅れとなった形態、限界効用理論として知られている——は、多くの点で優位を主張できる……それゆえ、明らかにされなければならないのは、マルクス主義者が最初にしようとしたように、限界効用価値説(彼らに対抗した理論であった)の妥当性に異議を唱えるのは完全に不条理であるということだけではなく、労働価値説を「誤っている」と言うだけでは不正確であるということである。何と言っても、それは死んでおり埋葬されている」(Schumpeter 1952, 29/ 訳46)。シュンペーターにしてみれば、限界効用価値説はすでに時代遅れの代物に過ぎないが、それでも、労働価値説に比べれば、現実の経済を説明する上ではるかに説得力がある理論であった。

マーシャルとシュンペーターに共通するのは、暗黙的にであれマルクスの「剽窃」という考えを退けた、ということにあるのではなく、むしろ、彼らがどちらもマルクスの理論を否定していたからこそ、マルクスをわざわざ貶める必要がなかった、ということにある。マルクスの理論が間違っていると思っているのならば、その「起源」がどこにあるのかを探るのは不毛で

35) エンゲルスは、1886年11月2日のラファエル宛の手紙で、以下のように書いている。「彼[メンガー]の見解は著しく馬鹿げているので、国民自由党系の新聞でもない限り、この見解は受け入れられないほどですが、そこではそういうことが私たちに繰り返し提示されるのを覚悟しなければなりません。しかし、そんなことは無意味です。ロートベルトゥスの恐ろしい幽霊ははるかに深刻でしたが、私たちはそれをすでに散々にやつつけたので、かれこれするうちに、完全に忘れられました」(MEW, 36 565)。エンゲルスはカウツキーと共同で書いた『法曹社会主義』によって前者を、資本論第二巻序文で後者を完全に批判したと考えた。しかし、「リカード派社会主義」の成立と、ロートベルトゥスの名前がシュンペーターの時代に至っても挙げられたという事実は、彼らの影響力の強さを物語っている。結果的に言えば、エンゲルスは彼らの影響力を、あるいは彼らを支持したい勢力の強さを過小評価していた。

ある。したがって、マーシャルが注を密かに削除したのは、彼の不誠実にあるというよりも、マルクスの「剽窃」の肯定も否定も彼の主要な関心事ではなかったからであろう。他方で、もしもシュンペーターのように墓掘り人となってそれを調査するならば、マルクスに対する攻撃的意図は抑えられ、ある程度公平に判断する余地が生まれるのである。

実は、労働価値説に対する攻撃自体は、ホジスキンの『労働擁護論』(Hodgskin 1825)を出版した際にも大々的に行われていた。というのも、その本の表題は「資本の不生産性を論ず」であり、ホジスキンは資本の生産性を否定し、従って資本家が利潤を得ることは正当化され得ない、と断言しているからである。鎌田は、以下のように結論づけている。「価値の実体を捨象して、交換比率という現象面のみに拘泥するようになること、これは社会主義者たちの全労働収益権の主張の理論的根拠をなす投下労働価値説を批判する武器として用いた需要供給論の必然的帰結である。だから、彼ら社会主義批判家たち〔リード、スクロップ、ロングフィールドなど〕は、社会主義者たちの批判を行うことによって、同時に古典学派の価値理論の批判をもあわせて行なったのであり、そのような意味から、また近代経済学の曙光を放ったのである」(鎌田 1968, 386)。つまり、1830年代に労働価値説に対する排撃は既に始まっていた。しかし、彼らの著作は、ホジスキンの反対論として書かれたため、ホジスキンの影響力の喪失と共に歴史から忘れ去られていった。内実はどうあれ、「社会主義の復活」の時代にマルクスが注目されるようになったために、労働価値説を真っ向から否定することが再び必要となったのである。マルクスに対する攻撃が、一方ではマルクスの独創性の否定、「剽窃」の指摘という形を取ったとすれば、他方では労働価値説そのものの否定という形をとったのである。シュンペーターの物言いが暗示しているように、いわゆる「限界革命」の革命性は、労働価値説を骨抜きにして³⁶⁾、新たな経済理論を作り出すことに成功したことにある。

しかし、「限界革命」の成功は、「リカード派社会主義」というラベルを不要にする。もしも労働価値説そのものの排撃に成功すれば、マルクスの「剽窃」を作り出すために、手に入れるのが困難なマルクス以前の諸文献を捲り上げる必要がなくなるからである。さらに、ブローグの言葉を借りれば、「労働価値説が現代の思想を支配している限り、利潤は労働によって生み出された剰余価値の譲渡であるという観念が容易に頭に浮かぶ」(Blaug 1958, 149/ 訳 230)ため、この説の批判に成功すれば、この説に依拠して社会変革を唱えた過去の社会主義者ら、そして未来の彼らの影響力を失わせることもできる。その意味で、フォクスウェルは、「リカード派社会主義」の創造だけではなく、「限界革命」への移行の橋渡しの役割も果たした、とい

36) 「1870年台にジェヴォンズ……メンガー……ワルラスによって限界効用価値説を根幹とする経済学説が唱えられ、いわゆる近代経済学(modern economics)の系譜が始まる。その根本的特徴は、労働価値説を根底から否定し、経済現象は抽象的な私的個人の主観的な選択行為の合成結果であって、彼らの自由競争が経済全体の均衡をもたらすのだと考え、経済的諸量の量的分析に力を注ぐところにある(新古典派)」(大谷 2001, 7)。

うことができる。反対に、シュンペンターがマルクスの「剽窃」をにべもなく切り捨て、限界効用価値説を否定したことは、反マルクス主義者らが、それを介さずに、マルクスの排除および労働価値説の駆逐に広く成功したことを物語っているのである。

第四節 「リカード派社会主義」ラベルの成立とその妥当性

「リカード派社会主義」や「労働全収権」は、フォクスウェルやメンガーが提唱した形では、残らなかった。「リカード派社会主義」がマルクスの「剽窃」から生まれたということは本論文で初めて指摘されたことなのだから、このことが意識されるはずもない³⁷⁾。マルクスが「リカード派社会主義者」から剰余価値論を「剽窃」した、ということを認める者は、今日では恐らく誰もいないであろう。

そして、このことは、「リカード派社会主義」というラベルが受け入れられた理由そのものを物語っている。確かに、フォクスウェルは、「リカード派社会主義」というラベルを作り出した。しかし、フォクスウェルや後続する反マルクス派の人々は、前節で見たようにマルクスの「剽窃」をイギリスの社会主義者の各々と結びつけて直接・間接に匂わせる発言はしていたものの、積極的にこのラベルを用いたわけではなかった。マルクスの攻撃の一つの材料として偶然作り出されたものが「リカード派社会主義」なのである。そして、「限界革命」の成功によって反マルクス派はマルクスの「剽窃」をあげつらう必要がなくなった。反対に、マルクス派にとっても、この「剽窃」は考慮に値しないものであった。

「労働全収権」についても事情は似たようなものである。メンガーは、マルクスの評価を貶めるために、マルクスの価値論の水準を主にトンプソンの水準にまで落とし込んだ。そのために用いられたのが、「労働全収権」であった。そしてメンガーの法学理論や「労働全収権」は、エンゲルス・カウツキーの「法曹社会主義」によって、根底から批判を受けたのである。

反マルクス派がこれらを積極的に用いず、またマルクスの「剽窃」などは考慮に値しない、あるいはその批判は十分であるとマルクス派が考えていたのであるならば、「剽窃」を証明するために生まれたこれらの付随物が、その「剽窃」から切り離されて受容される素地が存在する。要するに、「リカード派社会主義」というラベルや「労働全収権」という概念は、その作成者の意図を離れて、独り歩きしたのである。

37) メンガーやフォクスウェルが「剽窃」によってマルクスを攻撃した、ということ自体は筆者に限らず、以前よりなされている。たとえば隅谷は、フォクスウェルやメンガーによるマルクスへの攻撃に簡単に触れた上で、「リカード派社会主義にかかる〔マルクス派社会主義の根本思想を先取りしたものとしての〕重要な意義を與えることに対しては多くの意義が提出されたが、経済学史上彼等の占むべき地位と意義に関しては、未だ必ずしも定説を見ないといわなければならない」（隅谷 1952, 250）と言っている。事態はむしろ逆であって、マルクスを攻撃するために「労働全収権」や「リカード派社会主義」が生み出され、「リカード派社会主義者」に対して、マルクスに「剽窃」されマルクスより優れていた者であるという特別な意義が付与されたのである。

もっとも、「リカード派社会主義」ラベルの妥当性については、従来批判が行われてきた。例えば、大野によれば、以下である。「ただかれら〔オウエンと相前後して英国に出た一群の社会主義者〕の思想においては、リカードはロックやスミスやゴッドウィンやベンタムなどとおなじ程度に取扱われているにすぎないから、リカード派という形容詞は実際にはほとんどあたらないといってよい……かれらの展開した余剰価値と経済的な搾取の理論ならびに労働収益全収権の主張はマルクスの思想にはっきりした影響をおよぼした。マルクスは自分の経済学説体系の重大な部分がはやくもリカード派の社会主義者、とくにホジスキンの著作に出ているのを見出した」（大野 1955, 515）。後半の引用は、マルクスの「剽窃」の影響が感じられるが、「リカード派」という形容がおかしい、という指摘は大野に限らず、数多くなされてきた。単純な文献史的事実について言えば、ホールは「リカード派社会主義者」の一人に数えられているが、リカードの『原理』が1817年刊行なのに対し、ホールの主著は1805年に発行されている。例えば、ブローグは、 그레이やトンプソンはリカードを読んだ形跡がない、と言っている（Blaug 1958, 144）。他に、蛭原は、「彼らのうちリカードの経済学を意識的に自分の学説に適用しているのは T・ホジスキングらいなものであって、他のリカード社会主義者たちの経済学は事実上、上述したようなリカードのものを持っていたにすぎなかった」（蛭原 1994, 9）と指摘している。更に、ローウェンタールは、フォクスウェルに触発されて『リカード派社会主義』（Lowenthal 1911）という題の本を執筆したにもかかわらず、「社会主義者らが特に彼〔リカード〕の学説に強く印象を与えられたという証拠はない。彼らは全てアダムスミスを労働価値説の彼らの権威として引用し……ただホジキンだけが彼の著作を熟知していることを漏らしている」（Lowenthal 1911, 103）と指摘している。このように、イギリスの社会主義者らを「リカード派社会主義」というラベルでくくることの妥当性は、しばしば疑問に付されてきたのである。

このような欠点にもかかわらず、「リカード派社会主義」というラベルが今まで用いられてきた理由は概ね以下のように説明される。「リカード派社会主義という概念は、おそらくリカードが、労働価値説が共通の綱領であった学派の最も有力な人物であったという事実による」（Lowenthal 1911, 103）。堀も、ローウェンタールの推測を認め、エドモンズとホールも含めた上で、「これらの思想家の研究の主な対象は分配論であったが、古典派経済学者の中で斯論に重点をおいた最初の人はいりカードであった」（堀 1977, 61）という理由を挙げている。要するに、「リカード」は単に有名であるために便宜上用いられているだけであり、彼らは労働価値説支持者のうちの左派に当たるのであって、実際にはリカード左派ではない。

しかし、このようにラベルの問題点が克明に認識されているにもかかわらずそれが一定程度受け入れられたとすれば、それは受け取り手にとって都合が良い側面が存在したからである。マルクス経済学者らの側では、リカード左派がマルクスとリカードの中間点に位置しており、マルクスに乗り越えられた者たちである、という認識が存在した。その代表が平尾である。平

尾は以下のように言っている。「リカード派社会主義者は、空想的社会主義から科学的社会主義への過渡に位置するものであるが、かれらには空想的社会主義と共通する要素が色こくまといついていた。かれらの科学的社会主義の方向への前進はわずかなものであったとみなさざるをえない」(平尾 1975, 127)。また、鎌田による以下の整理も参考になる。「労働の搾取を資本と賃労働との不平等交換に求め、その解決策として、労働の生産物全部が直接に労働を投下した労働者の所有に帰属すべきだと主張している点を〔リカード派は〕共通にしている。つまり、スミス⇨リカード⇨リカード派⇨マルクスという支配労働価値説から投下労働価値説へ、不平等交換から剰余労働へ、の展開の系譜に位置づけられる」(鎌田 2000, 11)。鎌田自身はこれを支持してはいないが、この図式は、マルクスに至って初めて経済学は完成する、という理解を反映している。このように、マルクスとリカードとの架け橋として彼らを見なすこと、彼らを単なるリカードとマルクスの繋ぎとして扱うことは、マルクスの権威を決して損なわないのである。要するに、「リカード派社会主義者」から、マルクスの「剽窃」という要素を剥ぎ取れば、マルクス経済学者や経済学史家にとって、このラベルは十分使用に耐えうるものであったのである。

しかし、このような理解の問題点は、彼らを取り扱う意義そのものがない、ということにある。なぜなら、彼らは所詮マルクスの踏み台に過ぎないからである³⁸⁾。「リカード派社会主義者」のラベルの言説的研究が進まなかったのは、彼らがマルクスによって乗り越えられた者たちであり、したがって彼らを総括するラベルの厳密な検討をする必要はない、という意識が少なからず研究者の脳裏に存在していたことも理由としてあるのではないだろうか。

そもそも、なぜ「リカード派社会主義者」をイギリスに限定する必要があるのであろうか。また、なぜ1820～1830年代の経済社会思想家に限定する必要があるのであろうか³⁹⁾。例えば、隅谷は、当時イギリスで脅かされつつあった小生産者を擁護する立場から労働価値説によって立った社会主義者を「リカード派社会主義者」として扱っている(隅谷 1952, 266-267)が、やはりイギリスに限定する必要は説明されていない。実際にキングは、「リカード派社会主義者」にオーウェンを加えて、以下のように疑念を呈している。「この定義は全ての大陸の著者(そのうちシスモンディとブルードンは疑いもなく最も卓越している)を故意に排除している。それはまたある術語的な問題を避けており……彼らはその概念の非常に広い用法でのみ「社会

38) 「これら〔蛭原、平尾、鎌田〕の書物の関心は、古典派経済学とマルクスとの中間に位置する「リカード派社会主義」を、剰余価値学説形成史のなかに位置づけることにある……しかし問題は……これらの研究がマルクスの視点からした「リカード派社会主義」の一方的断罪になっているのではないかという感を時として抱かせる点にある。マルクス行きの列車に乗りながら、わざわざ「リカード派社会主義者」で途中下車する必要があるのか」(杉本 1993, 59)。

39) このことが意識されなかったのは、スミスないしリカードとマルクスの間に存在する彼らにはどのようなラベルが相応しいか、という問題意識が先行していたからであろう。つまり、マルクス以前という時間軸は既に前提されていたのである。

主義者」であった。そしてレーブンストーンとホジスキンはそれでさえなかった。しかし、このラベルは張り付いており、新しいものをここで開発するのは不必要であるように見える」(King 1983, 346)。つまり、キングは「リカード派社会主義者」というラベルは実際には的確ではないと認識しているものの、それに代わる有力な名称がないためにこれを用いているに過ぎない。「リカード派社会主義者」というラベルは、そう呼ばれる者が誰なのか、そして何のために彼らをそう括る必要があるのか、そしてラベルと器の関係が全く判然としないラベルなのである⁴⁰⁾。

ところで、この「リカード派社会主義」に替わりうるラベルを巡って、いろいろな論争が行われてきた。この論争においては、クレイズの研究が参考になる。クレイズは「ロック派社会主義者」というラベルを批判する際に、「この時代の社会主義は全体として私有財産、個人競争、生産手段の個人的領有の放棄によって圧倒的に定義されていた」(Claeys 1987, xxiv)と述べ、「社会主義者」というラベルを放棄している。「オーエン派社会主義者」については、 그레이やトンプソンがオーウェンを拒否しており、ホジスキンはオーウェンと関係がなかったといって批判し、「スミス派社会主義」についても、彼らがスミスの不平等の擁護やスミスの価値論が機械の効果によって無効になっており、「スミス派社会主義者の使用基準もまた、このような意見の相違[先に述べたオーウェンに対する彼らの態度の違い]を排除し、最初の「リカード派社会主義」というラベルと同様に、労働価値の抽象化の分析にのみ焦点を当てている」(Claeys 1987, xxv)、と批判している。

「スミス派社会主義」について付言すると、リカード、マルクス、ホジスキンの理論的關係について研究したハントが注意を促しているように、スミス自身の価値論がそもそも明確では全くない、ということに留意する必要がある。スミス自身、リカードのような剰余価値を労働生産物の価値からの控除とみなしているような表現もしている。このことは、先に言及したエンゲルスの資本論第二巻の序文で指摘されている。しかし、「スミス派社会主義者」を提唱する者は、スミスのこの面を無視している。つまり、思想家のある側面に注目し他を無視すれば、このようなラベルを生み出すことはできるのである。問題は、なぜそのラベルを積極的に用いるべきであるのか、という点にあるが、その点ははっきりしていない。

要するに、「リカード派社会主義者」が「リカード派」であるのか、それとも「スミス派」であるのか、といった、どのラベルが適正であるのか、という論争が行われてきたが、その決着はついていないのである。この論争において、問題は、器ではなく、器に貼り付けられるラベルの呼称にあるのである⁴¹⁾。例えば「スミス派社会主義」というラベルを提唱する者でも、

40) 鎌田は、そもそもこのようなラベルの使用そのものを拒否した。「私は本書ではホジスキンの、トンプソン、 그레이、エドモンズそしてブレイを考察の対象とするが、彼らすべてを一つの学派ないしがグループとして統括しようとするものではない」(鎌田 2000, 14)。

41) 誤解を招かないように付言すると、筆者は、現在用いられている「労働全収権」という器は、当時

「労働全収権」がリカード由来のものではなくスミス由来のものである、と主張しているに過ぎない。「リカード派社会主義」であれ「スミス派社会主義」であれ、「労働全収権」という器に当時の社会主義者を入れていることに変わりはない。マルクスが唯一の「リカード派社会主義者」である、という主張⁴²⁾に至っては、もはやラベルのためにラベルが存在するかのような観を呈している。この意味で、キングがこの器を承認しつつもラベルに囚われず、ラベルの問題は無益であると主張するのは正しいものであると言えよう。

このようにラベルを用いて分類することの最大の欠点は、分類されたものに含まれるそのラベル以外の要素が無視されがちである、ということである。例えば、永井はホールについて以下のように言っている。「メンガー（およびフォクスウェル）により提出されたイギリス初期社会主義の解釈の一面、つまり「全労働全収益権」と（リカードゥ）価値論との結びつきが、その後いくらか強調され過ぎて、十分な検討なしに「リカードゥ派社会主義」なる名称を生み出し……ホールは「リカードゥ派社会主義」なる名称が広く用いられるようになって以後、かえって、研究対象としてはまったくの脇役の地位に落ちてしまった感がある……「リカードゥ派社会主義」なる名称の、研究用語としての有用性が疑われていいのではないだろうか」（永井 1993, 134 注10）。例外的に研究が蓄積されてきたホジスキンの協同組合との関連で研究されるトンプソンを除けば、このことは他の「リカード派社会主義者」についても当てはまる。この意味で、ミンガルディの以下の見解は正当なものである。「言葉は、政治的には、現れては消えるものであり、その意味もそうである。今では過去のものになった語彙を用いる思想家を理解しようと努力を重ねる際に、彼らの思想における彼らのイデオロギーについての我々の結論を基盤とすることは、他者や彼ら自身によるラベルに頼るよりも賢い」（Mingardi 2018, 32）。それでもなお、もしも思想家らの共通点を取り出そうというのならば、その共通点为何のために、なぜ取り出すのか、という分析者の理論的基盤に則った観点が必ず必要である。言い換えれば、単にいろいろな思想家に共通する点があるという指摘だけでは不十分であり、そのことから何がわかるのか、も指摘されて然るべきである。けだし、偉大な思想家らは、先行するいろいろな思想家のいろいろな側面を受け継いでいるからである。それでもなお、思想家の理論の共通点を取り出そうと試みるならば、そのように彼らの思想を抽象する積極的な意義が必要不可欠である。そして、もしもそのラベル付けがなんらかの理論や方法論に基づいていないのであれば、そのようなラベルをわざわざ用いる必要はないのではないだろうか。

のイギリスの社会主義者らを括るものとして、今もなお有効であると考えている。「リカード派社会主義」という名称が用いられていたのも、それが一つ理由としてあるであろう。この意味で、「リカード派社会主義者」に代えて、彼らを括るものとして、「労働全収権支持者」という名称を用いても良いかもしれない。

42) トンプソンは以下のように言っている。「マルクスが唯一のリカード派社会主義者であった。ホジスキンの、グレイ、トンプソン、ブレイは「スミス派」の方がより適切かもしれない」（Thompson 1984, 105）。

終わりに

フォクスウェルやメンガーは、マルクスは先行するイギリスの社会主義者らの思想や理論を「剽窃」していた、と主張した。フォクスウェルにとって、リカードの価値論→「リカード派社会主義者」の価値論→マルクスの価値論という図式は、価値理論の発展過程を示すのではなく、前者の矢印はリカードの誤った経済学の影響を受けたということ、後者の矢印はマルクスによる「剽窃」を表していたのである。他方で、メンガーによれば、自身が初めて、あらゆる社会主義者が濃淡の差はあれ持っていた思想を法学的な形態で適切に表現したのであるが、トンプソンなどの社会主義者はこの思想において、マルクスを完全に先取りしていた。このようにマルクスのオリジナリティを貶めることによって、マルクスの影響力を削ぐために造り出されたのが「リカード派社会主義」や「労働全収権」であった。そして、限界効用価値説の普及によって、仮にマルクスの労働価値説にオリジナリティがあろうとも、そもそも労働価値説自体が誤りということにされたのである。しかし、「リカード派社会主義」や「労働全収権」はそのことによって消滅するのではなく、「剽窃」などの要素を取り除いた上で、マルクス経済学者や経済史家によって受け継がれていった。ラベルの呼称が適当であるかという問題は、「リカード派社会主義者」や「労働全収権」の成立事情という問題から目を逸らさせてきたのである。

凡例および参考文献

マルクス、エンゲルスからの引用は、*Marx/Engels Gesamtausgabe* については MEGA, *Marx/Engels Werke* については MEW と略記し、巻数と頁数を付記した。

日本語文献

- 遊部久蔵, 1967, 「リカード派社会主義者とマルクス——『資本論』前史としてのリカード派社会主義者およびとくにジョン・フランシス・ブレイの見解の意義について——」, 『『資本論』の成立』, 経済学史学会編, 岩波書店, 4-33。
- 蛭原良一, 1994, 『リカード派社会主義の研究——イギリス初期社会主義論——』, 世界書院。
- 大谷禎之介, 2001, 『図解社会経済学』, 桜井書店。
- 大野信三郎, 1955, 『経済学史 上巻 全訂版』, 千倉書房。
- マルクス, K., 1982, 『哲学の貧困 (ファクシミリ版)』, 青木書店。
- 鎌田武治, 1968, 『古典経済学と初期社会主義』, 未来社。
- 鎌田武治, 2000, 『市場経済と協働社会思想——イギリス資本主義批判の思想的源流——』, 未来社。
- 鎌田・蛭原, 1995, 「蛭原良一『リカード派社会主義の研究——イギリス初期社会主義論——』, 世界書院, 1994, iii+420p.」, 『経済学史学会年報』, 第33巻33号, p. 180-181。
- 小松善雄, 2006, 「『資本論』の社会主義像(下)——国家社会主義か, 市場社会主義か, 協同社会主

- 義か——」,『立教経済学研究』,第59巻第4号,1-31。
- 佐藤公俊,2014,「ピアトリス・ポッター(・ウェップ)によるマルクスの労働価値説批判」,『長岡工業高等専門学校研究紀要』,第50巻,9-19。
- 杉本貴志,1993,「リカード派社会主義」と協同組合思想史研究——研究史的展望——」,『協同組合研究』,第13巻第1号,58-69。
- 隅谷三喜男,1952,「リカード派社会主義序説」,『舞出教授還暦記念論文集(Ⅰ)古典学派の生成と展開』,東京大学経済学会,243-273。
- 住谷悦治,1929,「社会主義経済学説史」,『大思想エンサイクロペディア 15』,春秋社編,春秋社,129-186。
- 永井義雄,1993,『ロバート・オウエンと近代社会主義』,ミネルヴァ書房。
- 名古忠行,2005,『ウェップ夫妻の生涯と思想——イギリス社会民主主義の源流——』,法律文化社。
- 平尾敏,1975,『リカード派社会主義の研究』,ミネルヴァ書房。
- 堀経夫,1977,『改版 イギリス社会思想史概説』,文雅堂銀行研究社。
- 峯村光郎,1947,『近代法思想史』,世界書院。
- 米田庄太郎,1919,『輓近社会思想の研究 上巻』,弘文堂書房。
- ローゼンベルグ,1937,『経済学史 第2巻』(直井武夫・広島定吉訳),白揚社。

海外文献

- Bonar, James M. A. 1885. *Malthus and His Work*. London: Macmillan and Co. (堀経夫・吉田秀夫訳『マルサスと彼の業績』改造社,1930)。
- Blaug, Mark. 1958. *Ricardian Economic: A Historical Study*. Westport, Connecticut: Grennwood Press. (馬渡尚憲・島博保訳『リカドウ派の経済学: 歴史的研究』木鐸社,1981年)。
- Day, Fred. 2019. *Thomas Hodgskin's Political Economy: A Radical Reconstruction of his Economic Theories*. Japan: Praescentia Press.
- De Vivo, G. 1987. "Marx, Jevons, and Early Fabian Socialism." *Political Econom: Studies in the Surplus Approach* 3 (1): 37-61.
- De Vivo, G. 1988. "Ricardo and His Disciples: Orthodoxy and Socialism" *History of European Ideas*, 9 (2): 183-189.
- Eckhart, Müller. 1975. *Anton Mengers Rechts- und Gesellschaftssystem. Ein Beitrag zur Geschichte des sozialen Gedankens im Recht*. Berlin: Schweitzer.
- Foxwell, H. S. W1887. "The textbook of modern socialism" *Pall Mall Gazette*, 6, 13 May.
- Foxwell, H. S. 1899. Introduction." In *The Right to the Whole Produce of Labour: The Origin and Development of Theory of Labour's Claim to the Whole Product of Industry*, 5-110. London: Macmillan. (古沢友吉訳「リカード——派社会主義論」,『社会主義と歴史学派』東洋経済新報社,1954年/森戸辰男訳「社会主義に於けるイギリス学派」,『労働全収権史論』弘文堂書店,1924年)。
- Halévy, É. [1903] 1956. *Thomas Hodgskin trans.* A. J. Taylor. London: Ernst Benn.
- Hobsbawm, E. J. 1968. *Labouring Men Studies in the History of Labour*. London: Weidenfeld and Nicolson. (鈴木幹久・永井義雄訳『イギリス労働史研究』ミネルヴァ書房,1998年)。
- Hodgskin, Thomas. 1825. *Labour Defended against the Claims of Capital: Or the Unproductiveness of Capital proved with Reference to the Present Combinations amongst Journeymen*, edited by G. D. H. Cole. London: The Labour Publishing Company Ltd. (安藤悦子訳「労働擁護論」,桑原武夫・伊藤整・松浪信三郎・日高六郎編『世界教養思想全集』第5巻,河出書房新社,1964年)。
- Hunt, E. K. 1977. "Value theory in the writings of the Classical economists, Thomas Hodgskin, and Karl Marx." *History of Political Economy* 9 (3): 322-345.

- Hunt, E. K. 1980. "The Relation of the Ricardian Socialists to Ricardo and Marx." *Science & Society*, XLIV (2) : 177-198.
- King, J. E. 1983. "Utopian or Scientific? A reconsideration of the Ricardian Socialists." *History of Political Economy* 15 (3) : 345-373.
- Koepf, Carl. 1911. *Das Verhältnis der Mehrwerttheorien von Karl Marx und Thomas Hodgskin*, Wien: C. Konegen.
- Marshall, A. 1890. *Principles of Economics*, London: Macmillan and Co and New York. (馬場啓之助訳『経済学原理』東洋経済新報社, 1965年-1967年)。
- Menger, A. 1886. *Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag in Geschichtlicher Darstellung*. Stuttgart: J. G. Gotta'schen Buchhandlung. (森田勉訳『労働全収権史論』未来社, 1971年)。
- Mingardi, A. 2021. *Classical liberalism and the industrial working class: the economic thought of Thomas Hodgskin*. London: Routledge.
- Reisman, D. 1996. Introduction to Volume 1 by David Reisman, In: *Democratic socialism in Britain : classic texts in economic and political thought 1825-1952*, 1, edited by David Reisman, London: Pickering & Chatto.
- Schumpeter J. A. 1952. *The Great Economists from Marx to Keynes*, New York: Routledge. (山伊知郎・東畑精一監訳『十大経済学者：マルクスからケインズまで』日本評論社, 1952年)。
- Schumpeter J. A. 1954. *History of Economic Analysis*, London: Routledge. (東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史』岩波書店, 2005年)。
- Schütze, G. H. 1930. *Die Lehre von der Verteilung in der Volkswirtschaft bei Thomas Hodgskin: Ein dogmenkritischer Versuch*, Leipzig : F. W. Gloeckner & Co, G. m. b. H.
- Thompson, N. W. 1984. *The people's science: The popular political economy of exploitation and crisis 1816-1834*, Cambridge University Press, Great Britain at the University Press.
- Lowenthal, E. 1911. *The Ricardian Socialists*, New York : Columbia University Press.
- Wallas, G. 1898. *The Life of Francis Place 1771-1854* : London New York and Bombay : Longmans, Green, and Co.
- Webb, B. & Webb, S. 1894. *The History of Trade Unionism: By Sidney and Beatrice Webb*, New York : Longmans, Green and Co. (飯田鼎・高橋洸訳『労働組合運動の歴史』日本労働協会, 1973年)。
- Webb, B. . 1926. On the Nature of Economic Science, ((1) My Objections to a Self-contained, Separate, Abstract Political Economy and (2) A Theory of Value), In *My Apprenticeship*, 422-430, London: Longmans and Green Company. (佐藤公俊訳「ビアトリス・ポッター・ウェッブ「経済科学の本性について」の紹介と翻訳」『長岡工業高等専門学校研究紀要』第44巻第1号, 79-86頁, 2008年)。
- Wicksteed, P. H. 1884 "Das Kapital, A criticism," *To-day, The Monthly Magazine of Scientific Socialism* 1: 388-411。